



Title	地域社会からみた北大演習林II. : 天塩地方演習林の事例
Author(s)	神沼, 公三郎; 秋林, 幸男; 佐藤, 冬樹
Citation	北海道大学演習林試験年報, 16, 47-48
Issue Date	1998-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73261
Type	departmental bulletin paper
File Information	1997_1B-7.pdf



I B - 7 地域社会からみた北大演習林 II. - 天塩地方演習林の事例 -

北ステーション 神 沼 公三郎
天塩地方演習林 秋 林 幸 男
雨龍地方演習林 佐 藤 冬 樹

1 天塩地方演習林と山火事予防問題

地方演習林と当該地域社会との関係のあり方は、地方演習林ごとにそれぞれ異なるが、天塩地方演習林は北大演習林のなかでも、地域社会との結びつきを最も強く保持している地方演習林である。その最大の理由は、かつて天塩地方演習林の森林の多くが山火事被害をこうむったため、山火事を予防する意識が歴史的に強く継承されているからだと推察される。山火事を予防するには、地元住民の協力を仰ぎ、地元と一体となった監視体制をつくり、維持していく必要がある。そのためにも、山火事予防の地元組織との日常的な結びつきを重視してきたのだと考えてよい。

2 山火事予防組織

毎年、春の融雪後に山火事予防組織の総会を天塩地方演習林で開催して、当年度の組織体制を固める。総会には幌延町、消防署、警察署、天塩地方演習林の所在する幌延町問寒別地区の森林愛護組合長など、総勢50人近い関係者が参集する。この体制により5月、6月の山火事危険期、その後の夏季から降雪前の時期まで、監視体制を継続する。秋になると、山火事予防問題に関する半年間の総括を行うため、ふたたび会議を開催するが、この会議は森林愛護組合長を中心に、10人ほどの人数で開催される。冬季は山火事の危険性がないので、山火事予防組織は活動する必要がない。そして翌春になると、ふたたび前年と同じ手続きが繰り返されることになる。

3 森林愛護組合長へのアンケート調査

1997年12月9日、山火事予防会議に出席するため天塩地方演習林に参集した森林愛護組合長らに対して、アンケート調査を実施した。恒常的組織の場を利用して、天塩地方演習林の運営に対する地域住民の評価を集約しようとしたものであるが、1998年5月の総会のとき、総会出席者全員を対象にもう一度アンケート調査を実施したので、今回の調査はいわば予備的調査だった。

会議に参集し、アンケート調査に協力されたのは森林愛護組合長6人、天塩地方演習林への入林者に対する入林許可証交付者1人、天塩地方演習林の林内巡視者1人の計8人であるが、本稿ではこれらの人たちを一括して森林愛護組合長と称することにする。8人のうち1人は幌延町の本町に居住しているが、この人は最近、問寒別地区から本町に転居したので、むしろ本町よりも問寒別地区の状況に詳しい。8人の年齢階層は70歳以上3人、60歳代4人、40歳代1人である。問寒別地区に生まれ育ったか、あるいはすでに長期間、問寒別地区に居住し、森林愛護組合長などの任務や日常生活をつうじて、いずれも天塩地方演習林の歴史をじっくりと眺めてきた人たちである。

4 アンケート調査の結果

質問は17項目にわたった。回答方法は、選択式と記述式を適宜、織りまぜるようにした。これらのうち、主に天塩地方演習林に対する評価についての質問と回答を紹介しよう。

質問「なぜ森林愛護組合長を努めているのか」(複数回答)に対しては、「幌延町から指名されたから」(4人)、当該の「町内会から依頼されたから」(1人)という公的な理由とともに、「山火事が発生しないよう、最善の注意を払いたいから」(3人)、「過疎化の進行で当該地域に適当な人がいないので、どうしても」(2人)という、地域を守る使命感を理由に挙げた人もいる。

質問「森林愛護組合長の仕事は負担になるか」に対しては、「全く負担にならない」(5人)と、「やや、あるいはかなり負担になる」(3人)にわかれた。天塩地方演習林は山菜採取入林者の管理(特に入林者名簿の管理)を、森林愛護組合長に委託している。後者の答えを選択した人は、居住地が天塩地方演習林における代表的な山菜採取場所の近隣にあるため、多くの山菜採取入林者の管理に相当の労力を費やしている。そして質問「森林愛護組合長として天塩地方演習林の運営に何を求めるか」(複数、記入回答)に対しては、無回答(3人)あるいは「現状でよい」(1人)という回答がある一方、「山火事危険期には演習林の職員も(何らかの程度)、見回りをするべきだ」(2人)、「入林者に山火事予防を呼びかける宣伝を強化すべし」(1人)という回答、そして「入林者のマナー向上」(1人)を求める回答があった。

質問「天塩地方演習林の運営内容をどのように評価するか」に対しては、「昔(10年ぐらい前)は林業経営中心だったが、いまは試験・研究中心である」とみる回答が5人、「昔も今も林業経営」が1人、「昔も今も林業経営と試験・研究」とする回答が2人だった。林業経営から試験・研究へ変わったとみる理由としては、(複数回答)「天塩地方演習林を訪れる研究者などが増えているから」(3人)、「森林内に設置されている実験装置が増えているから」(1人)、「伐採量が減少しているので、その分、相対的に試験・研究の仕事が増えている」(2人)とみる回答などが示された。

質問「天塩地方演習林における最近の森林状態をどのようにみるか」に対しては、7人が「昔(10年ないし20年ぐらい前まで)はうっそうたる天然林があったが、いまは天然林の大径木が極端に少なくなっている」を選択した。

質問「天塩地方演習林における山火事跡地の人工造林(特に問寒別川の東側)をどう評価するか」については、「十分な手入れを重ねて、ぜひとも成功させるべきだ」(5人)が最も多かったものの、「風当たりの強い場所なので、人工造林は無理だろう」(1人)、「成功するかどうかは別にして、試験・研究としては意味がある」(2人)という評価も貴重である。

質問「天塩地方演習林の運営に、今後、何を望むか」(複数回答)に対しては、「何よりも試験・研究機関として発展してほしい」(6人)が最大だったが、「試験・研究機関の性格だけでは地域社会とのつながりがうすい」と判断する人も4人いる。さらに「立派な森林を創り上げるために、林業技能補佐員の雇用の堅持」(5人)、「もし問寒別地区に適当な人がいるなら林業技能補佐員の新規採用」(2人)、「演習林の仕事は出来るだけ外注化を」(1人)という意見分布だった。

5. アンケート結果から得るもの

上述のように、回答者はいずれも長期間、天塩地方演習林の推移を観察してきた人たちである。そのため、森林状態や運営内容の変化について、的確で鋭い評価をくだしている。その上で、試験・研究機関としての一層の発展を希望するとともに、一面では森林造成への取り組みや人の雇用など、地域の環境問題、地域経済の問題について天塩地方演習林に期待するところもまた大である。地域社会の人たちは、まさに総合的な観点から北大演習林をみているといえよう。